

# 方向

第一六八号 一九九五年三月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

## 李賀歌詩編

(訳注稿 三) 1995.02.23 原田憲雄

(一〇〇六)

竹

竹

〔竹〕・竹 朝鮮本は「竹光」とする。それなら、竹の光。この詩は、昌谷で作ったものだろうか、作時は不明。官吏になる八一一年より前のものであろうか。

(一〇〇六)

水に垂れる 波紋がゆらぐ

〇一 入水文光動

空にぬきんでる 緑の影は春

〇二 抽空緑影春

キラキラと露の花さくたけのこの徑

〇三 露華生筍逕

霜ふいた根っこをはらう苔の色

〇四 苔色拂霜根

むしろに織れば 香しく汗ばむ肌ささえ

〇五 織可承香汗

竿に切れば 錦鯉たって釣れるだろう

〇六 裁堪釣錦鱗

太子用の三梁冠の柀にもなった

〇七 三梁曾入用

ひと節あなたにさしあげましょうか

〇八 一節奉王孫

〇一 〔水に入つて 文光（文先） 動き〕 ・ 入水 この語と次句の抽空の主語は竹。 ・ 文先 他のすべての本が「文光」とし、それがよい。光る波紋。

〇二 〔空に抽んで 緑影 春なり〕

〇三 〔露華 筍逕に生じ〕 ・ 露華 露が輝いて花のようにみえるもの。李白「春風檻を払って露華濃や

かなり〕（清平調） ・ 筍逕 竹の子の生える小道。逕を朝鮮本などは「徑」とする。音義ともに同じ。

〇四 〔苔色 霜根を払う〕 ・ 霜根 肌に霜を吹いたような竹の根もと。杜甫「幸いに幽人の屋に近く、

霜根結んで茲に在り〕（苦竹）

〇五 〔織れば香汗を承くべく〕 ・ 織 織つて竹むしろにすれば。 ・ 香汗 美肌を流れる香しい汗。賀

にはまた「香汗宝粟を霑す」（十二月楽辞五月 一〇二八）の句があり、この語を好んだ。梁の簡文帝

「簾文玉腕に生じ、香汗紅紗を浸す」（詠内人昼眠）に学んだのであろう。

〇六 〔裁てば 錦鱗を釣るに堪う〕 ・ 錦鱗 美しい魚。鮑照「錦鱗に戯れて夕べ映え」（芙蓉賦）

〇七 〔三梁 曾て用に入る〕 ・ 三梁 冠に五段のものと三段のものがあり、五段のものは天子用、三

段のものは太子や諸王用だという。その段をつけるための梓を梁といい、竹で作る。 ・ 曾入用 周の

成王が元服のとき、周公は零陵から竹を取り寄せ冠を作ってやったという。

〇八 〔一節 王孫に奉ぜん〕 ・ 王孫 王者の子孫や貴公子のことをいったが、後には若旦那とか、あな

たとかいうほどの呼びかけ言葉になった。ここでは李賀が、知人の王族か貴族の青年に、あなたも太子

になられるよう、この竹のひと節をあげましょうか、といっているのであろう。軽い戯れである。

(一〇〇七)

沈駙馬に当たった「御溝水」の題に唱和して

同沈駙馬賦得御溝水

〔沈駙馬が御溝水を賦得せしに同ず〕 ・沈駙馬 駙馬都尉の沈さん、の意。駙馬は添え馬で、天子の

予備の車を引く馬である。その馬を司る長官を駙馬都尉といい、漢の武帝のとき設けられ、秩二千石だった。魏晋のころから、公主の夫、すなわち天子の娘の婿、にはかならずこの職が与えられた。唐代では実質のともなわぬ名義だけの職になり、従五品下だったが、とにかく駙馬といえは天子の娘婿。賀の知友には沈氏の人が多く、ここの沈氏が誰かについて諸説あり、わたしは西河公主の夫だった沈翬かと推測する。拙稿「馮小憐」（李賀論考）参照。 ・賦得 宴会などで詩を作るとき、幾つかの題を出し、籤引きかなにかで割り当て、当たった題で詩を作る。これを「賦得」という。 ・御溝水 御溝は宮城内を流れる河。天子に関わる物にはしばしば「御」の字をつける。御衣、御苑、御花のように。さて沈駙馬に当たった題が「御溝水」だった。そのことを同じ席でか、あるいは後日、沈氏から聞いて、よくならこう詠むよ、と行って作ってみせたのだ。そういうふう唱和するのを「同ず」という。

(一〇〇七)

御苑に入ると白くひろびろと輝いて

〇 入苑白泱泱

宮女たちがお化粧をなおします

〇 宮人正髻黃

堤をめぐるとき龍の骨みたい冷ややかだが

〇 遶堤龍骨冷

岸辺をあらえば鴨の頭のように香しい

別館では夢の名残りを驚かせ

酒を飲みやめ盃浮かべる人もある

さまよい流れはしたものの　さいわい

お逢いできました　何晏のような婿どのに

○四 拂岸鴨頭香

○五 別館驚残夢

○六 停盃泛小觴

○七 幸因流浪處

○八 暫得見何郎

○一〔苑そのに入れば　白くして泱泱おうおう〕　・入苑　この詩の全体が御溝水を擬人化しているので、入苑、すな

わち御苑ぎょえんに入るのは御溝水である。　・泱泱　広く深いさま。詩経「維れ水泱泱」（小雅瞻彼洛矣）

○二〔宮人きやうじん　靨黄ようこうを正す〕　・靨黄　唐代女性の化粧法に、頬に色模様をつけるのがあり、えくぼのあたりに黄色い顔料で描くことが多いのでこういった。正すとは、御溝水を水鏡にして化粧を直す。

○三〔堤めづを遶めぐって　龍骨りゅうこつ　冷やかに〕　・龍骨　御溝水が堤をめぐって流れるとき、龍の骨のように見えるのだ（鈴木）溝辺の砌の石の形容とする説があるが、よくない。

○四〔岸かたを払はらって　鴨頭おうつこ　香かばし〕　・鴨頭　御溝水が岸を洗うとき波立って、無数の鴨の頭のように見え、その緑が匂やかだ。唐代の染色の名に「鴨頭緑」というのがあり、李白の「遙かに見る漢水の鴨頭

緑」（襄陽歌）はそれだと王琦がいう。

○五〔別館　残夢ざんむを驚かし〕　・別館　御溝水が別館の近くを通るとき、水音によって、そこで暁の夢を

見る人を驚かせる。別館を、鈴木は沈駙馬の宮苑内の館とする。残夢がいっそう艶めく。班固「離宮別

館」（西都賦）

〇六 「盃はいを停とどめて小觴しょうを泛うかぶ」 ・停盃 酒を飲む手を暫くとどめる。楊素の「琴を横たえて還また独坐し、盃を停めて遂に君を待つ」（贈薛内史）のように一人で飲む酒ともみられなくはないが、小宴会とするほうがよい。

・泛小觴 觴はさかずき。泛觴は流觴と同じく觴を流れて浮かべる遊び。荆楚歳時記に「三月三日、四民並びに水渚に出で、流觴曲水の飲をなす」といい、もとは素朴な民俗だったが、のちには貴族の宴会となり、前のものの浮かべた盃が自分の前に来るまでに詩を作り、できなければ罰盃を科して戯れた。王羲之の蘭亭の遊びが有名。儲光羲「洛東に觴を泛べて遊ばん」（京口送別王四誼）

〇七 「幸いに流浪りゅうろうの処よに因よって」 ・流浪 陶淵明が「流浪して成るなし」（祭從弟敬遠）というように成功しないのがあたりまえなのに、わたし（御溝水）は流れさまよったおかげで、泛觴の遊びの処で、幸いにも、というほどの意。

〇八 「暫しばらく何郎かろうに見あうを得たり」 ・何郎 魏の何晏かえんは、論語集解の著者だが、白晳の美男としても有名で、曹操の娘の金郷公主をめとり、駙馬都尉となった。ここでは、沈駙馬を何晏にたくえている。

(一〇〇八)

奉礼郎になつたばかりで昌谷の山家が思われる

始爲奉礼憶昌谷山居

〔始めて奉礼ほうらいと爲り昌谷しょうこくの山居さんきょを憶おぼう〕 ・奉礼 官名で奉礼郎のこと。礼楽などのことを司る太常寺

に属し、二人いて従九品上、朝廷の会合や祭典に席次をきめたり先導をしたりする。皇室の遠縁に当たる者をしばしば恩惠的に採用した。李賀が奉礼郎になったのは八一一年、唐の十一代憲宗（七七八一—八二〇）の元和六年の春で、賀は二二歳だったろう。

(二〇〇八)

馬の蹄のあと掃いて

〇一 掃斷馬蹄痕

役所がえりの門しめる

〇二 衙廻自閉門

なべには米が煮えていて

〇三 長鑪江米熟

ちいさな棗は花の春

〇四 小樹棗花春

壁には如意をぶらさげて

〇五 向壁懸如意

すだれを覗く角頭巾

〇六 當簾閱角巾

犬にたよりを持たせたい

〇七 犬書曾去洛

鶴がみやこで病気だと

〇八 鶴病悔遊秦

さどでは新茶も壺につめ

〇九 土甌封茶葉

竹杯もしまいっきりか

一〇 山杯鎖竹根

せっかく雲間をのぼる月

一一 不知船上月

舟こぎだして誰が見るやら

一二 誰棹滿溪雲

〇一 「馬蹄の痕を掃斷し」

・掃斷

掃き尽くすこと。

・馬蹄

役所へ出入りする者は、馬車か乗馬で

くるから、蹄の跡がのこる。それをいまいましく思うような感情が「掃断」の語にほのめいている。

○二〔衝がより廻かえりて自ら門みずかを閉とず〕　・衝廻　衝は役所。廻を錦囊集などが「回」とする。いずれにしても、帰ること。地位の低い役人でも下僕は持つのだが「自分で門を閉める」のは、このときはそれもなかったのだろうか。

○三〔長鎗ちやうせう（槍）江米熟し〕　・長槍　宋蜀本などが「長鎗」とし、それがよい。米の名で、タイ米のように長細い。鎗を「鑑」とみて「なべ」とする説がある。　・江米　江南の米。米を錦囊集が「未」とするが、誤り。

○四〔小樹　棗花そうか　春なり〕　・棗花　なつめの花。中国に野生する小喬木で春夏のころ葉腋に黄白色の可憐な小花をつけ、長楕円形の実を結び、暗赤色に熟し、食用になる。

○五〔壁かに向いて如意にょいを懸かけ〕　・向壁　向は於と同じ意。　・如意　道士や僧や隠者がたずさえる道具で、角、竹、鉄などで蕨形に作り、物を指したり、引き寄せたり、時に応じて思いのままに使うので如意という。晋書「如意を以て唾壺を打つ」（王敦伝）

○六〔簾すだれに当あたって角巾かくきんを聞きる〕　・当簾　当も於とはほ同じ。　・角巾　かどのある頭巾。官職を持たない者がかぶった。晋の名臣羊祜は手紙に「もう国境戦争も終結した。角巾をつけて道を東にとり古里に帰ろう」と書き地位に執着しなかった。この話を知っている賀は、角巾を見れば帰りたくなっただろう。しかし如意も角巾も、任官してまもない若い官吏にふさわしい持ち物ではない。

○七〔大書おほしよ　曾かつて洛らくを去さり〕　・犬書　晋の詩人陸機りくきの飼犬は人の言葉を理解した。機が洛陽の都に行つたとさ呉の家からの便りが長い間とだえたままなので「手紙をもって消息を聞いてこないか」といった

ら尾を振った。手紙を竹筒に入れ首につけると、犬は家に帰り返事をもらって返ってきた(述異記)わ  
たしにもそんな犬がいるなら、手紙を書きたいが。犬を錦囊集が「尖」とするが、誤り。

○八〔鶴病 秦に遊びしを悔ゆ〕 ・鶴病 鶴のように痩せこけてわたしは病気になる、というほどの意。

その鶴を、昌谷にいる賀の妻、あるいは恋人とみる説があり、また賀が飼っている鶴とみる説もある。

・秦 長安の雅称。その所在の陝西が、昔は秦の土地だった。

○九〔土甌 茶葉を封じ〕 ・土甌 土で焼いたコシキだが、茶の葉を入れる壺のようなものを指す。主

人の賀がないから、封をしたまま開けてもいないのだろう、というのだ。

○一〇〔山杯 竹根を鎖さん〕 ・山杯 山家の杯。それが竹の根でつくってある。賀の愛用したものが、

それも仕舞い込んであるだろう。庾信「野爐に樹葉を然やし、山杯 竹根を捧ぐ」(奉報趙王惠酒)

二〔知らず 船上の月〕 ・不知 口語の「：：かしら」というのに当たる。

三〔誰か満溪の雲に棹ささん〕 ・棹 毛氏本などが「權」とする。音義ともに同じ。

(作品番号 一〇〇九)

た な ば た

七夕

〔七夕〕 ・七夕 七月七日の夜。荆楚歳時記に「七月七日、牽牛と織女の聚会の夜となす」という。

牽牛は鷲座のα星アルタイル、織女は琴座のα星ヴェガで天の河を隔ててあい対する。伝説によれば、

牽牛が織女を娶るとき天帝から二万錢借り、返さないため、二人を離し、この夜だけ、天の河を渡って



会うのを許した、という。織女は、天帝のために衣を織り瓜や果物を作るのを職としたといわれるので、七夕には五色の糸を針に通し、瓜などを庭に並べて祭り、瓜に蜘蛛が糸を張れば織物が上手になる、というような習俗が生まれた。この詩は、それらの伝説を背景に、会えぬ恋人たちを歌った。

(一〇〇九)

別れの渚は今朝から暗く

〇二 別浦今朝暗

とばりを垂れて真夜なか愁う

〇三 羅帷午夜愁

かささぎ去って針まつる月

〇三 鵲辭穿線月

花が舞いこむ衣ほす樓

〇四 花入曝衣樓

天上でふたつに割れた金の鏡

〇五 天上分金鏡

世間の人は玉の鉤と眺めるだけ

〇六 人間望玉鉤

錢塘の蘇小小

〇七 錢塘蘇小小

また会ったのは 一年の秋

〇八 更値一年秋

〇二 「別浦 今朝 暗く」 ・別浦 曾益などが「別渚」とする。意味は変わらない。去年、牽牛が織女

と別れたところで、天の川を指す。杜甫「蕭条として別浦清し」（奉送卿二翁統節度鎮軍還江陵）も、

天の川ではないが、人と別れる浦である。 ・暗 曇っているので、天の川が荒れて渡れなくなるかも

しれぬ。

〇二 「羅帷 午夜 愁う」 ・羅帷 薄絹のカーテン。古辞「羅帷自から飄揚」（傷歌行）女性の部屋を

指す。・午夜 昼の正午に対し夜中をいう。戴叔倫「松門午夜の風」（重遊長真寺）

○三 「鵲は辞す 線を穿つ月」 ・鵲辞 七夕には鵲が天の川の上を翼で覆い橋として牽牛と織女を会わ

せてやる、という伝説があり、賀より後の人だが李郢が「烏鵲橋頭双扇開き、年年一度河を過りて来たる」（七夕）と歌っている。その鵲が「辞す」というのは、恋人たちを渡しもせず去ってしまった。

・穿線月 色系を通した針などを供えた祭壇を、片割れ月が照らしている、天上で牽牛と織女が会えないのに。以下、終わりの句までの、あっけらかんとしてチグハグなところが、この詩の身上である。

○四 「花は入る 衣を曝す樓」 ・花入 花を藜簡などが「螢」とすべきたらうという。 ・曝衣樓 七月

七日には、一般に書物や衣の虫干しをする習慣があり（初学記）漢代の宮城では太液池の西に武帝の曝衣閣があって、七月七日に宮女が登って衣を曝すのが例だった（太平御覽、宋朴子楊園苑疏）

○五 「天上 金鏡 分かる」 ・分金鏡 七日は月がちょうど半分になるときだから、鏡を分けたようだ、

という。これに「破鏡」の故事が加わる。むかし夫婦が別れるとき、鏡を二つに分け、互いに半分をもった。のち妻が他の人と通じると、その鏡が鵲になって夫のところへ飛んできた。鏡の背中に鵲の模様を鑄るのは、このことから始まった（神異経）すると、先に飛び去った鵲も鏡の片割れだろうか。

○六 「人間 玉鉤を望む」 ・人間世界では、その片割れ月を見上げて「玉の鉤みたいだな」なんて言っ

ている。呑気なものだ。鉤は簾を巻き上げて支えるもので、金具が普通だが宝玉製のものもあった。初学記に「似紈扇 如玉鉤」の対句を挙げ、注に鮑照「織織如玉鉤」（翫月城西門）を引く。

○七 「錢塘の蘇小小」 ・錢塘 浙江、杭州の港。南朝の齊のとき、その遊郭に蘇小小という妓女がいた。名妓や美女の代詞として使われる。ここのはそれ。詳しくは後の「蘇小小の歌」のところで説明するが、

同じ蘇小小でも、扱いかたが、まったく違う。二つの作品の間には、思想の上での決定的な事件があったと考えられる。「七夕」は初期の作であろう。ところで、森瀬は「六朝から唐にかけて七月七日は仏教の盂蘭盆会や道教の三会日の宗教行事に摂取されている古い民間信仰の習俗で、この日『曝衣』するのは衣類に霊が憑りつくためのもの」とする小南一郎説を紹介し、この詩における蘇小小は神女降臨譚などと関わり、未婚で死んだ女性の「再生譚に見える死霊としての女性」だという（李賀における道教的側面）。ここの蘇小小が没个性的であることからすれば、そうも言いうるかもしれない。

○八〔更に値う 一年の秋〕 ・更値 七夕を祭って恋人を待った美女が、また会えたのは。 ・一年秋 一年たってさらにわびしい「秋」だった。

(作品番号 一〇一〇)

### 華清宮に立ち寄り寄って

過華清宮

〔華清宮を過りて〕 ・過 立ち寄ること。 ・華清宮 長安の東、いまの陝西臨潼縣の南にある驪山

西北の温泉に設けられた、唐の皇帝の宮殿の名。ここに湧く温泉に目をつけ秦の始皇帝が初めて宮殿を建て、そののち、漢の武帝など長安を都とした皇帝たちが修理を加え、盛衰を繰り返して、唐の二代太宗がたびたび臨幸して「温湯宮」と名づけ、三代高宗が「温泉宮」と改め、六代玄宗が大改修して「華清宮」と改め、楊貴妃とともに遊樂したことは、白居易の「長恨歌」によって有名（ただ、「長恨歌」は虚構がまじり、事実と合わない点の多いことは既に先人がいっている）安祿山の変後、使われなくなり、

賀のころには荒れはてていたことが、この詩によって察せられる。

・この作は、唐の太宗や玄宗の諸作と関わり、太宗が「過舊宅」詩二首でみずから謳歌した帝業や、玄宗が「過晋陽宮」詩で披瀝した帝王としての決意に、反問するような気味がほのめく。八一三年、賀が奉礼郎をやめて故郷に帰る途中か、それ以後のものであるろう。拙稿「唐の太宗」(李賀研究五)参照。

(一〇一〇)

春の月 夜啼くからず

〇一 春月夜啼鴉

宮殿の簾は 花の向こう

〇二 宮簾隔御花

雲わいて 朱の網 くらく

〇三 雲生朱絡暗

敷石きれて 紫の苔が 斜めだ

〇四 石斷紫鏡斜

祭壇の玉腕に 雨露あふれ

〇五 玉腕盛殘露

銀色の燈火とぼる 古びたとばり

〇六 銀燈點舊紗

蜀王からは 近ごろ便りなく

〇七 蜀王無近信

泉のほとりに 角ぐむ芹

〇八 泉上有芹牙

〇一 「春月 夜啼く鴉」・春月 宝翰楼本は「春夕」とするが、誤り。

・啼鴉 「楊柳啼鴉に伴う」

(答贈 三一四四) 「鴉は金井に啼き疎桐下る」(十二月楽辞九月 一〇三三)など、賀はよほどの

鳥が気になるとみえ、あちらこちらでしきりに歌っている。

〇二 宮簾 御花を隔つ」・宮簾 杜甫「宮簾翡翠虚し」(秋日荆南送石首薛明府) 李賀「黄桑露を飲

んで宮簾寧たり」(南園十三首二 一〇四七) ・隔御花 宮殿の簾と作者の間を御花が隔てている。

御花は宮中の花。「同沈駙馬賦得御溝水」(一〇〇七)の注参照。

〇三 「雲生じて 朱絡 暗く」 ・雲生 王由礼「雲生じて石路深し」(賦得巖穴無結構) ・朱絡 朱色の網。宮殿の戸の飾り。

〇四 「石断えて 紫錢 斜めなり」 ・石断 敷石がくずれて、道が切れているのであろう。 ・紫錢斜

紫色に日焼けした錢苔が、敷石の切れ目を斜めに覆っている。太宗「園荒れて一径断え、苔古りて半階斜めなり」(過旧宅) 錢を宋蜀本は「泉」とし、朝鮮本は「雲」とするが、ともに誤り。

〇五 「玉椀 残露を盛り」 ・玉椀 華清宮には、いろいろの祠宮があり(鈴木)、その祭壇に供えられた玉づくりの椀であろう。椀を、宋蜀本は「碗」とし、朝鮮本は「盃」とするが、音義ともに同じ。

〇六 「銀燈 旧紗に点ず」 ・銀燈 銀の飾りの燭台。 ・點舊紗 ふるびた紗のとばりのかげに燈火が点っている。舊紗を曾益本は「絳紗」とする。それなら深紅色のとばり。 ・五、六句「玉椀」「銀燈」

の対しかたは太宗「金輿巡白水、玉輦駐新豊」(過旧宅)の金輿と玉輦の対とそっくりだ。

〇七 「蜀王 近信無く」 ・蜀王 蜀(四川)の王。一般には、安祿山の変で蜀に逃れた玄宗を指すものとする。ただ「王」というのは、王子かそれに準ずる人の呼称だから、天子を呼ぶには軽すぎる。そこ

で、賀が唐の官吏だからその朝廷の天子玄宗その人を指すのを遠慮したとする説があり、人民を忘れた天子を諷刺非難して呼び方を貶下したとする説があり、そうであるにしても天子を「王」と呼んだりす

るのか李賀の詩に理を欠くゆえんだ、などとさまざまに論議される。別に玄宗の六男で蜀王に封ぜられ、無頼であった李愔と推測する学者もいる。直接には玄宗と見るのが穏やかだが、間接にはかつて華清宮

を經營享樂し今はいないすべての権力者を含め言うもの、とするのがよいだろう。

○八 「泉上 芹牙有り」 ・泉上 温泉が、使用されなため冷えてただの泉となり、そのほとりには。

・芹牙 芹の角ぐむ芽、すなわちキバのように尖った芽が、ぎっしり生えている。牙を、他本すべて「芽」とし、そのほうが常識としては分かりやすいが、「牙」とするのが賀の発想で、「桑牙今尚小」

（感諷五首一 二二〇八） 「陰枝拳牙卷縹茸」 （新夏歌 四二二六） 「宮牙皆小椿」 （経沙苑 四二二

八） みなしかりである。詳しくは拙稿「宮牙」 （李賀研究三） 参照。 ・この七、八句は太宗「一朝此

の地を辞し、四海遂に一家と為れり」（過旧宅） の効果を裏返している。しかし太宗の作との関連を考慮に入れなくても「一結、不尽の致があり」（王琦） 「意到り語到り」（姚佺） 内容も表現も完璧で

あるところが、この詩のよいところであろう。

（作品番号 一〇一一）

### 沈亞之を送る歌 と その序

送沈亞之歌并序

〔沈亞之を送る歌 并びに序〕 ・沈亞之 字は下賢、吳興（浙江）の人。長安で李賀と友となり、八

一五年の進士。秘書省正字、櫟陽令、福建団練副使、殿中侍御史内供奉ののち、南康尉に左遷され、鄂州の椽に終わる。生卒年は不明だが、八三一年以後まもなく死んだらしい。賀とはともに韓愈の弟子で、先に見える賀の友の沈述師や沈駙馬とは親戚にあたる。詩人としても小説家としても勝れ、唐才子伝に伝がみえる。この歌については序のところで説明するが、拙稿「沈亞之を送る歌」（李賀研究一二）参

照。 ・并序 この二文字は朝鮮本には無い。

(一〇一一)

文人の沈亞之君は、元和七年、書学の試験に及第しなかつたので、呉江へ帰ることになった。わたしはその旅を悲しんだが、ねぎらってやる錢も酒もない。また沈君が懇ろに頼むのに感動し、詩を一つうたってねぎらうことにした。

○ 文人沈亞之。元和七年。以書不中第。返歸于呉江。吾悲其行。無錢酒以勞。又感沈之勤請。乃歌一解。以勞之。

○〔文人沈亞之、元和七年、書に中第せざるを以て、呉江に返歸せんとす〕 ・文人 宋蜀本は「丈人」とするように見える。丈人は、一般に老人を指し、また父の友人、妻の父を指す。亞之が賀の妻の父とは考えにくいが、賀の父晋肅の年少の友の可能性はないではない。ただ序の書き方から察すれば、賀と同年か、わずかに年少のようだ。 ・元和七年 八一二年。賀が奉礼郎に任官した次の年で、これは長安での作だろう。 ・以書不中第 文官試験の書学科を受験して合格しなかった、の意であろう。唐代の文官試験には諸科と制挙があり、諸科は常例の普通試験、制挙は天子が直接、臨時に行なう特別試験である。諸科も時代によって改廃され、唐六典には、秀才、明經、明法、進士、書、算の六科を挙げる。このうち秀才がなくなり、明經と進士の二科に受験者が集中し、進士科出身者から宰相が輩出したため進士科が殊に重んじられた。亞之は自ら「元和五年、進士の試験を受けるため都にきた」（与李給事薦

士書」という。それなら賀とともに進士科を志望したことになり、賀は諱事件で断念し、亞之は落第したのだから、別に「わたしを進士科に推薦する人があり、去年始めて都に來たが落第し、今年また來て」（与京兆試官書）という。あとの手紙に「七年作」とあり、それが事実なら「始めて來た去年」は六年になり、先の手紙と合わず、七年に受けたのが進士科なら、賀の序にいう「書を以て中第せず」の書を書学とすることに矛盾が生じる。「七年作」が誤りなら、問題は無い。

・吳江 吳興、すなわち浙江の湖州。時代により吳興といい湖州といった。太湖西南岸の大都會で、東岸、江蘇の蘇州に對した。蘇州の近くに吳江というまちがあるが、この吳江とは別。沈氏は吳興でもっとも知られた氏族である。「吾れ其の行を悲しめども、錢酒の以て勞する無し。又、沈の勤請に感じ、乃ち一解を歌い、以て之を勞す」・吾悲 宋蜀本などには「吾」字がない。・勤請 懇ろな求め。・一解 一首というほどの意。ふつう楽章の一節、すなわち何段かからできている歌の一段を「解」といい、賀のこの詩は四解だが、ここではそれをひっくりくるめて一解と言っている。「解」を蒙古本は「缺」とするが、誤り。勞之 王琦は「送之」とし修辭としては勝るが、他の本はみな「勞之」である。

(一〇一一)

- 一 吳興で知られた才ある人に 怨めしい春風
  - 二 桃花滿陌千里紅
  - 三 紫絲竹斷驄馬小
  - 四 家住錢塘東復東
  - 五 白藤交穿織書笈
- 桃の花 まちに満ち 千里さきまで紅だ  
 紫の手綱はとったが 竹の鞭おれ 驄馬小さく  
 家は錢塘 東の そうだそのまた東  
 白い籐で編みあげた 書籍専用の背囊には



小型本をきっちり詰めた 印度伝来のお経みたい

に輝かしい宝玉となる鉱石を 試験官に 提出しよう

と水けふる波越えて 一葉の舟でやってきた

試験官は 白日のもと 人材を選ぶというのに

黄金を投げ捨て 龍馬をむざむざ放逐した

背囊しよって呉江へ帰り ふたたび門にはいるとき

いたわるひとは誰だろう しみじみと君を愛して

男にとっては 土性骨こそ第一 だとさ

そう言や 昔の連中も三度敗れて 挫けなかった

さあ沈君 朝になったら 長い鞭あげ 行きたまえ

次は車で駆けつけるんだ 秋の試験に間に合うように

○六 短策齊裁如梵夾

○七 雄光寶礦獻春卿

○八 煙底蕪波乘一葉』

○九 春卿拾材白日下

一〇 擲置黃金解龍馬

一一 携笈歸江重入門

一二 勞勞誰是憐君者』

一三 吾聞壯夫重心骨

一四 古人三走無摧挫

一五 請君待且事長鞭

一六 他日還轅及秋律』

○二 (吳興の才人 春風を怨む) ・才人 今の日本の語感では薄っぺらな要領人間のことだが、これは

左伝文公十六年にいう「材人」と同じく、その地域でこれはと注目されている才幹をもった人を指す。

ここで「材人」としないのは九句の「拾材」との重複を避けるため。左伝の同じところに楚軍が七戦七走したのち敵国を滅ぼす話があり。一四句の「三走」と照応する。

○三 (桃花 陌に満ち 千里紅なり) ・陌 東西に通じる道を陌といい、南北に通じる道を阡という。

あわせてともに巷のこと。・千里 晋代の楽府に「汝忽ち千里去って常無し」(青驄白馬)

〇三〔紫系 竹断えて 驄馬小さく〕 ・紫絲 紫の手綱。同じ楽府に「青驄白馬紫系の韁」といい韁がその手綱。 ・驄馬 韋毛の馬。驄を唐詩紀事は「駿」とする。

〇四〔家は錢塘に住して 東復た東〕 ・錢塘 浙江杭州、またそこにある港。亞之は吳興の出身だが、このころ家は錢塘にあったのだろうか。「七夕」(一〇〇九) 参照。斎藤は錢塘について「ここではほんやり浙江省一帯をも指した」という。 ・東復東 亞之の家が、長安からは、東のまた東、というのだ。吳興は地図上では長安の東南に当たるが、交通の便からいえば、亞之の「淮南都梁山倉記」にいうように、黄河から分かれた汗水が、東流して淮水に合流し、淮水から東は、米や帛など税に当たる主要物産の輸送路だから、東へ東へと水路をとるのが早道なのだ。

〇五〔白藤 交ごも穿って 書笈を織り〕 ・白藤交穿 白藤は藤で、交穿とは編みあわせること。書笈 負うように作った本箱。神仙伝「二侍者あり。一は書笈を負い、一は葉笈を携う」(封衛)

〇六〔短策 齊しく裁って梵夾の如し〕 ・短策 文の短い書冊。 ・梵夾 インドの仏教經典。

〇七〔雄光の宝鉞 春卿に献せんとし〕 ・雄光寶礦 雄奇な光沢の寶石鉞のような才能。礦は鉞の別体。

・春卿 文官採用試験を主管する尚書省礼部の長官。古代には諸官を四季にわりあてたが、礼部はその春官にあたるので雅称として代用された。その人に宝鉞を献じるとは受験すること。賄賂ではない。

〇八〔煙底 波を薫え 一葉に乗ず〕 ・煙底 水煙の下というほどの意。 ・一葉 一隻の小舟。

〇九〔春卿 材を拾う 白日の下〕 ・拾材 人材を選択する。材を王琦の本が「才」とするがよくない。

一〇〔黄金を擲置し龍馬を解つ〕 ・沈亞之を落第させたことを、このように譬えた。

二〔笈を携え 江へ帰り 重ねて門に入るに〕 ・歸江 江は、おおざっぱに江南を指すのであろう。

帰江を宋蜀本は「帰家」とする。それなら家に帰る。

三〔勞勞 誰か是れ 君を憐れむ者ぞ〕 ・勞勞 いたわるさま。 ・憐君 樂府の青驄白馬は八曲の

うち五曲まで「可憐」という囉し言葉がはいつていて「好きな人」というほどの意。ここでも、家あるいは錢塘の花柳の地で「可憐」と呼び君をいたわるのは誰か、という心を含ませているのであろう。

三〔吾れ聞く 壯夫は心骨を重んじ〕 ・壯夫 「丈夫」とする本があると王琦がいう。 ・心骨 精神と身体のことだが、ここでは訳文の通り。

四〔古人 三走するも 摧碎する無し と〕 ・三走 春秋時代の英雄管仲は、三度戦って三度負け、

逃走したが、みずからひるまず、友人の鮑叔牙もかれを卑怯だとはしなかった、という話が史記の管仲伝に見える。 ・摧碎 「摧碎」とすべき碎を韻の都合で「碎」で代用したのでないだろうか。それな

ら、くじける。魏志「褚は石を飛ばせて之を擲ぐるに、値うところ皆摧碎す」（許褚伝）。鈴木は「摧碎」とすべきだろうという。

五〔請う君 且を待ちて長轡を事とし〕 ・待且 「且」を毛氏本が「且」とするが、誤り。

六〔他日 轡を還して 秋律に及べ〕 ・還轡 車の長柄を返す。返ってくることを。 ・及秋律 律は音律のことだが、一二カ月を一二音律にあてる習慣があるので、秋の月ということを秋律ともいう。この季節は文官採用試験の行なわれる時期であり、それに及ぶ、とは間に合うことである。

・注でたびたび触れたように、この詩は樂府の「青驄白馬」と関わりが深い。青驄白馬は、菱採り女と見物の男との掛け合い歌だから、擲揄や皮肉の切れ味を見せるのが主だ。それをとってきて賀はしみじみした送詩にしている。別のものにはしているが、「これは君の教えてくれた青驄白馬の替え歌だ。こ

んど君が帰ってきたら、本物の青驄白馬を歌って、また一杯やろう」と、湿りがちな沈亞之の心を、いたずらっぽい明るさに引き寄せようとするやさしさも込めてある。替え歌には、さまざまの効用がある。賀が楽府の名手と言われるのは、その効用に精通していたことも当然含まれていたはずである。かれの怪詭をいう人は多いが、そのやさしさや軽みを指摘する者のあまりないのはふしぎだ。

・李賀は、八一〇年、進士の受験を断念した。そのとき、誰にも会いたくなかった。酒を酌んで送ろうという友にも人づてに断って、しょんぼり長安を立ち去った。このたびの沈亞之の落第に、別れの席を設けなかったのは、あのつらさを思いやったからだ。賀のやさしさに感じたので、亞之はまたことさら送詩を求めた。その事情を語るのが序文の「ねぎらう錢も酒もない」と「ねんごろに請う」なのだ。奉礼郎は低い地位にしても官員で、友を送る酒代くらいは、借ることもできたはず。いくら前の日の悲しさを思っても、「君もそうだろう」とはいうべきでなく、そこで錢と酒のせいにしてみせた。しかし、別れの言葉をのべに立ち寄った亞之に、ことば通り酒を出さなかった、と考えることはいらぬ。亞之は後年、李膠という青年が落第して帰ろうとするとき、青年を送る文章を書き、その中で李賀に触れているのは、膠が賀を想起させる詩才だからと言っているが、むしろ落第の人を送る立場になって、賀のやさしさがふいに甦り、そのなつかしみが眼前の李膠への思いやりとなったのではないだろうか。

※前号正誤

四頁九行

「少年」

↓ 少年

六頁四行

可憐な小婦

↓

可憐な少婦

一八頁四行

示弟

弟に

↓

弟

に

示弟

〃頁五行

「弟」

↓

弟

## 石清水 八幡宮

1995 02 19 原 田 慶

正月八日、誘ってもらって初詣で行った。石清水八幡宮には以前から行きたいと思っていた。この神社は、貞観元年（八五九）大安寺の僧行教が宇佐八幡を勧請して、平安京の守護神として祭祀したといわれている。宇佐八幡大神の「吾れ都近き石清水男山の峰に移座して国家を鎮護せん」との託宣を蒙ったということであるが、この男山は京都の南入り口の重要な位置にあり、高い建物のない時代には京都の方から見ることのできる山だったらしいから、その山の上で平安の都を守ってくださるのは、安心なことだったに違いない。子どもの頃には、神社はどこも同じ神様だと思っていたし、神様は白いひげを生やしたおじいさんだと思っていた。それでも八幡さんという名前は知っていたから、全国に最も広く信仰された神様だということはどうなづける。

八幡神について、わたしの理解しているところでは、もと、製鉄の力をもった渡来系の人々の守り神で、その人たちが神功皇后に協力したので、皇后が海を渡って新羅を征することができたといひ、八幡神は奈良の大仏様を造るのにも協力されたということであるから、やはり鉄に関係のある神様だったのだろうと思っている。呼び名の由来についてはいろいろあるが、民俗学の五来重氏は、石清水八幡で正月十八日に行なわれる青山祭に八幡の由来があると考えておられた。青山祭のヒモロギが八角形で、その角ごとに幡を立てるからだという。この青山は常盤木の枝葉で八角形に囲い込むお仮屋だそうであるが、現在も頓宮（とんぐう）の前庭で行われている。渡来系の神だとか八本の幡だとか言っても説明しにくいので、八幡神の根本はさしおいて、わかりやすく祭神を応神天皇とその母の神功皇后、それに韓土との交通の要路を守護した宗像の神々としたのではないだろうか。

ところでわたしが八幡さんに行きたかったのは、八幡宮に西行や一遍といった上人たちの姿がちらちらするからだ。石清水だけでなくて、宇佐、大隅、鶴岡などの八幡宮にも参詣している。西行はもと鳥羽院の北面の武士だったこともその理由の一つだろう。国家鎮護の神だから、天皇のたびたびの行幸も当然のことである。白河法皇は亡くなる前年の大治三年（一一二八）にも鳥羽上皇とともに石清水八幡に御幸されたという。この時には西行は十一歳でまだ鳥羽院に仕えていない。一遍のような念仏聖が参詣したのは、八幡神が武家の守り神とされるように勇ましい反面、その代表的な行事である放生会で死者の鎮魂を行なう神でもあったからだといわれる。この由緒は元正天皇の養老四年（七二〇）に宇佐八幡宮に祈って隼人族を討伐したが、その時に殺害した隼人の霊を慰めるために毎年放生会を行なえと八幡神が託宣されたのだそうである。現在は放生会とは言わず、石清水祭として本殿から山の下の頓宮へ神輿の渡御があり、その時に頓宮の北側の放生池で鳥魚が放たれ、池の上に造られた舞台で胡蝶が舞われるそうである。その日も八月十五日だったのが、今は九月十五日に変わっている。この放生会は、祇園祭や今宮神社のやすらい祭と同じように、鎮魂の儀式なのだそうである。西行の山家集に「男山二首」があつてその一首は放生会の歌である。

みこしをさのこゑさきだててくだりますをとかしこまる神のみや人

さてわたし達三人は京阪の四条駅で待ち合わせて電車に乗り、八幡で降りるとすぐケーブルに乗った。山上まで五分である。急な傾斜で、高野山に登った時のことを思い出した。山上の駅に降りると、この山が京都府の歴史的環境保全地域で、クスノキの巨木をはじめ八百種の植物が生育していること、野鳥なども多いことが立て札してあつて、わずか五分ほどで深山にきたのかと思つた。しかしそのまま山道を右手の方へまわって行くと、突然明るい広場に出た。自動車も上がってきている。広場の中央に大きなしだれ桜があり、金属の高いモニュメントが立っていて、エジソンがこの地の竹をフィラメントの材料として使つたという記念碑も作つてあつた。クスノキの大変な巨木が何本も

あって、広い公園のようになっていた。わたしが想像していたのとはずいぶん違う。エジソンの碑は立っていても、西行や一遍、念仏衆の影はどこにも感じられない。物の陰やクスノキの根本をのぞいてみても何の跡もなかった。新しい現代の建物がいくつも見える。それは青少年文化体育研修センターや体育館だった。通り抜けて少し上へ出ると、そこは本殿への参道で、風景が一変した。参道は切石が敷かれて自然の山道ではないが、巨木のトンネルで、やはりシイヤクスノキが多い。歩道の両側には大きな古い石灯籠がびっしりと並んでいる。これなら法皇や天皇の行列も、念仏衆の影も感じられる。正面の朱塗りの総門は、大きな唐破風のはでな形である。しかし彫刻などはなくてあっさりしている。

その前に謡曲の「弓八幡」の説明の立て札があった。この曲は、男山八幡宮の神徳をたたえ威武の聖代を祝う曲であると言われている。後宇多天皇の使者が石清水に参詣して神様から袋に入れた桑の弓を受け「弓を袋に入れ、剣を箱に納むるこそ泰平の御代のしるしなれ」と教えられる。八幡神は平和を愛する神なのである。門を入ると神楽殿で、二人の巫女さんが神楽を舞って矢を祈禱し、それを人々が行列して受けていた。正面本殿は二層の造りになっていて、屋根は檜皮ぶき、朱塗りの堂々とした建物である。正面の両柱に屋根まで届く高い矢がたててあった。社殿は火災や暴風で何度も建て替えられていて、現在のものは寛永八年、今から三百六十四年まえに徳川家光によって造営されたものだそうである。わたしが期待したようなものはなかったが、やはり長い歴史を持っていて、しっかりと山上に建んでいた。二層の本殿から飛翼のように両側に伸びている回廊は後で建てられたもののように、平等院の鳳凰堂を思い出させる。

いっしょに行った人がおみくじを引いたらよいのが出て、商売繁盛だと言っていた。応神天皇は厄除け開運の御神徳と、わが国の文教の祖、殖産興業の守護神とされている。わたしは八幡さんのお使いである鳩の土鈴を買った。

帰りは裏参道から急な石段を歩いて下りた。どこかに歴史の跡が残っていないかと見ていたら、中腹のそれほど広くない台地に「萩の坊跡」という石碑と、別の場所に「護国寺跡師堂跡」という碑を見つけた。念仏衆と関係があるかどうか分からないが、仏教に縁がありそうだったと思った。

山の下へ着くと、そこは表参道の入り口で、すぐ右に二の鳥居が見えた。左へ行くと八幡神の御旅所の頓宮である。門の前、左の少し高いところに高良神社がある。小さい社だけれど、この地の氏神様だと書いてあった。謡曲では八幡神の御託宣だと言って桑の弓を朝廷の使者に授けた神様である。狭い境内に天然記念物のタブノキの巨木があった。太い幹が破れて空洞が見える。根本から伸びた若木も親と変わらないくらい丈高くなっていた。

頓宮に入ると、ここは色がつけてないので簡素で静かな感じがする檜皮ぶきである。この御旅所は明治元年に焼失し、今の宮殿は大正四年、廻廊は昭和四十四年の建築だそうである。その裏側に放生池があった。池の傍を通ってすぐ一の鳥居を出ると外は町である。昔はこのあたりも森や田畑だったのだろう。天皇や親王の行列が通ったり、西行や一遍のような聖達もここを歩いたかもしれない。想像すると自然の中の人間の小ささを感じるが、西行、一遍、どちらの上人も武家の暮しを捨て、自然の中に身を投じて、すべてのものの生命を見つめ続けた人だった。こころの温かい真の人間だったとわたしは思っている。一所に止まらないということは自分にとらわれないということだろう。人の世を出て、外から眺めるような生き方をした西行は孤独に耐えた。出家したのは二十三歳だったという。南無阿弥陀仏ひとすじに生きて自坊を持つとうとしなかった一遍も愛の人だったといわれる。どちらの上人も優れて強靱な身体と精神力を持っておられた。わたしも今度生まれてきたら、自分を鍛えてもう少しましな生き方をしたいと思うけれど、そんな頃にはみんな忘れているから、どうせろくなことはできそうにない。

わたし達は、一の鳥居の前の茶店で走井餅を御馳走になって、次の目的地、松花堂庭園へとバスに乗った。